

Title	<研究論文>二重否定表現「～なくは/もない」「～ないでも/はない」「～ないことは/もない」「～ないものでは/もない」の使い分けを巡って
Author(s)	パリハワダナ, ルチラ
Citation	京都大学国際交流センター 論攷 (2013), 3: 43-59
Issue Date	2013-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/187059">http://hdl.handle.net/2433/187059</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 研究論文

# 二重否定表現「～なくは/もない」 「～ないでも/はない」「～ないことは/もない」 「～ないものでは/もない」の使い分けを巡って<sup>(1)</sup>

ルチラ パリハワダナ

## 要 旨

N1 レベル乃至 N2 レベルの文法的な機能語として位置づけられている二重否定諸表現の使い分けの習得は上級日本語学習者にとり、大変困難である。本論では二重否定の諸表現が現れている文脈とその表現意図に着目することによりそれらの諸用法と使い分け方の解明を試みた。その結果、1) 先行する発話やそれにより生じる含意を否定しながら例外を指摘したり、補足したりする用法、生起・可能性・存在などが皆無でないことを表す用法及び断定や直接的な言い方を避けながら和らげる用法の三用法においては全ての二重否定表現が使用可能であること、2) 譲歩を表す場合及び意志性を有した慣習的な行為などを認める場合は全ての表現が使用可能なものの、「～なくは/もない」表現の使用は限定的であること、3) 他者に対する理解を示す場合は「～なくは/もない」表現及び「～ないでも/はない」表現に、一方、全称的解釈を否定しながら部分否定を表す場合は「～ないでも/はない」及び「～ないことは/もない」の二表現に、更に、全否定による肯定的な意味や可能性の強調を表す場合は「～ないことは/もない」表現に限定されることが明らかになった。なお、本論の考察を通して二重否定表現は断定回避機能や他者配慮を表す機能などを通して、コミュニケーションの円滑な遂行に重要な役割を果たしていることも明らかになった。

【キーワード】二重否定, 部分否定, メタ否定, 和らげ, 配慮

## 1. はじめに

「～ないものでは/もない」は、国際交流基金(1994)では「文法的な機能語」として分類され、日本語能力試験1級レベルのサンプル語として提示されている(p.176)。一方、「～ないことは/もない」は2級レベルの語として位置付けられている(p.169)。それらは同書においてそれぞれのレベルの機能語の例として挙げられているが、1級(現N1)レベルの類義表現としてしばしば一緒に扱われる表現に「～ないでも/はない」「～なくは/もない」がある(友松1996はその一例である(p.209))。上級日本語学習者にとって、意味の類似性の高いこれらの表現の使い分けの習得は極めて困難である。しかしながら、日本語学習者を対象とした文法解説書のみならず、二重否定に関する先行研究においてもそれらの使い分けの方法が明らかになっているとは言いがたい。そこで、本論はこれらの諸用法の分析を通して、その使い分けの解明を試みる。

論文末に挙げる小説、随筆、ドラマのシナリオなどの作品および新聞から採集した4つの二重

否定表現の実例を分析する方法で本論を進める。各例の用法の判定を行う際には前後の文を含むコンテキストを手掛かりにする。

以下において、先ず、先行研究を概観した上で本論のアプローチを明確にし、各表現の形式的な特徴について考察する。次に、とりたて助詞「は」「も」によって二重否定の意味解釈がどのように変わるか分析する。最後に、二重否定の諸用法を分析しつつ、用法別の使い分けについて検討する。

## 2. 先行研究における扱いと本論のアプローチ

日本語学または日本語教育観点から日本語の二重表現を分析した研究として原口（1982）、庵他（2001）及び泉原（2007）が挙げられる。

原口（1982）は、「～ないことはない」及び「～ないものではない」について、二重否定の反転により肯定となる「否定の否定」として位置付け、結果として生じる肯定の意味が弱められていることを指摘している。

- (1) 食べられないことはないがまずい (p.82)
- (2) 食べられないものではない (p.82)

更に、「こと」と「もの」を比較しながら、(1)の「こと」は判断(命題)の否定であり、(2)では「食べられないものだ」という認識が否定されていると述べている。また、否定の意味を弱める形式として「では」に着目しているが、原口において上記の二つの表現の使い分けに関する具体的な検討は見られない。

庵他（2001）において、「～なくは/もない」「～ないことは/もない」という両表現が「～ないわけには/もいかない」「～ないわけでは/もない」と共に二重否定表現として位置付けられている。その記述によると、「は/も」によっては意味の違いが殆ど生じない。動詞否定の「Vなくは/もない」用法は基本的に無意志動詞に限られ、Vが不可能ではないという意味を表す(例3)。一方、「～ないことは/もない」もほぼ同じ意味を表すが、ナ形容詞及び名詞は「～ないことは/もない」表現に限定される(例4)(pp.305~306)。

- (3) 彼の気持ちは分からなくはない。(p.306)
- (4) ここは静かでないこともないが、車の音が気になる。(p.306)

しかしながら、「Vなくは/もない」に対する「不可能ではない」という上記の解説は、特に過去形で現れる非意志動詞表現に対して直接的に当てはまるとは言えない。

- (5) もつとも、ピカソあたりの描く女性とは似ていなくもなかった。(女社長)

例(3)では「(理解する)分かることが不可能ではない」という風に直接的に認識(動作)そのものの可能性を問題にしていると捉えられるのに対して、例(5)に対しては「似ていることが不可能ではない」という解釈は不可能である。例(5)は過去のある時点における判断を描写しており、従って「似ているという判断が不可能ではなかった」のように判断または捉え方に対する叙述として解釈しなければならない。ここから、二重否定の意味についてより詳細に検討する必要があることが窺われる。

泉原（2007）は「～なくは/もない」を除く本稿で取る挙げる全ての表現を例として挙げている。その記述によれば、二重否定とは「～ない」の前に現れる出来事(次ページの例の「行く」)の可

能性の一部を否定して、一部を肯定する部分否定のことである。

(6) 行きたいとも思ってるから、誘ってくれば、行かないでもないんだ。

(p.1060, 下線は筆者)

泉原 (2007) は使い分けについて、「は」及び「も」を基準に行われ、「は」が用いられれば、部分否定を否定する部分肯定になり、一方「も」が使われれば、あいまいで婉曲的な表現「部分肯定／部分否定」になると述べている (pp.1060~1061)。しかし、泉原においても二重否定諸表現の使い分けの方法が明確になっていない。

以上取り挙げた日本語に関する従来の研究における扱いを主たる着目点別に次の表の通りにまとめることが出来る。

表 1 従来の研究における扱い方

文献名	着目点			
	「は／も」による相違	(述語として共起する語の) 品詞による制約	否定の強弱	判断の介入
原口 (1982)	○	—	○	○
庵他 (2001)	×	○	—	—
泉原 (2007)	○	—	○	—

【○】：関与要素として扱われている、【×】：関与要素として扱われていない、【—】：言及が見られない

以上見てきたように従来の日本語の研究において、二重否定表現の諸用法もその使い分けの方法も明らかになっていない。しかも、これらの表現がいかなる文脈で現れているのか、話し手の表現意図は何かという点に着目した分析も見られない。そこで、本稿では、四つの二重否定表現の基本的な形式を確認した上で、各形式がいかなる文脈において現れ、どのような機能を果たすかを考察することで、四形式の諸用法とその使い分けの解明を試みる。

### 3. 基本的な特徴

#### 3.1 各表現の形式的な特徴

まず、二重否定表現として扱われるためには二つの否定形式が現れていなければならない<sup>(2)</sup>。本稿では中右 (1994)<sup>(3)</sup> に従って、内部に包み込まれている否定形式を内部否定と呼び、それに対して包み込む役を果たす語順上後接する否定形式を外部否定と呼ぶことにする。

次に形式面に着目しながら、それぞれの表現について考察する。

(a) 「～なくは / もない」

「～なく」(否定助動詞 / 否定形容詞)「ない」の連用形 + とりたて助詞「は / も」 + 補助形容詞「ない」

(7) だが、それが事件の発端だったといえなくもない。 (平成)

(8) いや、本音を言えば、それよりこちらの方が大事ではないかという思いもなくはなかった。

(夏)

「～なくは/もない」表現の場合、動詞に後接する否定助動詞、または形容詞に後接する否定形容詞の連用形「～なく」に否定の補助形容詞が直接付いている。とりたて助詞「は」または「も」は否定の二形式の間に位置している。外部否定形の接続のための、形式名詞「こと」「もの」による内部否定の名詞化が行われていない。その上、例8のように過去形を取ることも可能であり、ある程度の出来事描写性を有していると言える。

(b) 「～ないでも/はない」

～ない (否定助動詞 / 否定形容詞「ない」の連体形) + 判定詞「だ」の連用形「で」 +  
とりたて助詞「も/は」 + 補助形容詞「ない」

(9) サルが二匹でテレビに出ても仕方がないので、勘弁していただいたが、少し残念な気がしないでもない。

(風)

(10) 紅茶だけ飲んでおく、という手もないではないが、何か、腹に力がこもらない感じである。

(太郎)

「ないでも/はない」表現の場合、内部否定が判定詞「だ」構文に埋め込まれている。判定詞の連用形に外部否定形式が付く形となっているが、とりたて助詞「も」または「は」は、判定詞と外部否定の間に位置する形を取っている。事例ではとりたて助詞「は」を若干上回る程度の「も」が見られた<sup>(4)</sup>。後述するように「も」は、部分否定の結果として表現される(部分)肯定の主張を和らげる。従って、「も」の現れは、否定形式及び判定詞により生じる強い主張を和らげる効果をもたらしていると言える。

(c) 「～ないものでは/もない」

～ない (否定助動詞 / 否定形容詞の連体形) + 形式名詞「もの」 +  
判定詞「だ」の連用形「で」 + とりたて助詞「は/も」 + 補助形容詞「ない」

(11) どのような夫婦の様態なのかと興味津津の登希夫が好奇の眼を光らせてふたりを観察するであろう。ただでさえ性への興味に衝き動かされている思春期の登希夫が、どんな窃視的行為に出ないものでもない。

(読売新聞 2012年 11月 18日)

(12) 98年に肝炎感染が明らかになり、インターフェロン治療の副作用に耐えながら、十数年前のカルテ開示を病院に申し入れた。そこには「フィブリノゲン」の文字があった(中略)。これらの投与が決して避けられないものではなかったことが、不条理な無念さで患者たち、そして死者たちを眠らせない。

(2008年 1月 31日 読売新聞)

この表現の場合、形式名詞「もの」が内部否定形式を被連体修飾語として受け止め、それによ

り規定された性質や一般的な特徴などを外部否定で打ち消す形を取っている。形式名詞「もの」が本来表す性質や一般的な特徴といった意味が生かされていると判断できる。

(d) 「～ないことは / もない」

～ない (否定助動詞 / 否定形容詞の連体形) + 形式名詞「こと」 + とりたて助詞「は / も」  
+ 形容詞「ない」

(13) 「そういえないこともないですが……」 (王様)

(14) 確かにそういった懸念はないことはない。 (夏)

(15) 本坊夫人は母と気が合うだけあって、男みtainな性格だし、悌四郎氏は確信に満ちてみみちいところに太郎は深く尊敬を覚えているのだが、だんだんこうしていると親共の監視の網が張りめぐらされていくような気分になって、憂鬱でないこともない。 (太郎)

「～ないことは / もない」表現の場合、内部否定形式の表す存在・成立等の事実を外部否定形式が打ち消す形を取っている。内部否定を打ち消す外部否定は話し手の主張として表現され、出来事描写性が少ない。そのことが「～ないことは / もない」表現が過去形で殆ど現れないことからも頷ける。

また、庵他 (2001) において指摘されているようにこの表現の内部否定形式の述語は動詞・イ形容詞に限定されず、例15のように名詞述語を取ることもできる。実例の中には見られなかったが、庵他 (2001) において挙げられている例4のように、ナ形容詞述語を取ることも可能である。

上記の表現に共通しているのは内部否定・外部否定という二重の否定形式が使われている点及びとりたて助詞「は」「も」が現れているという2点であることが分かる。

### 3.2 二重否定諸形式の基本的な意味

意味に着目すると、これらに共通するのは外部否定が内部否定の主張 (の一部) を否定しているということである。つまり、内部否定の表す否定的主張の全称性が否定され、その結果として部分否定の解釈が成立するわけである。無論、結果として生じるのは単なる肯定的な主張ではなく、あくまでも主張の全称性の否定による成立・存立可能性や認識・理解、習慣の存在に言及する程度の表現に過ぎない。

とりたて助詞「は」「も」の現れにより、部分否定の量的解釈が変わり得る。従って、とりたて助詞「は」「も」が部分否定のあり方に大きく関与していると言える。その関与の仕方について以下の3.3節で詳しく取り挙げる。

(16) その天誅ともいうものが3・11の (東日本) 大震災だった、という受け止めが、あながち当たっていないことはないと思う」と述べた。

(朝日新聞 2012年7月18日)

(17) 「そういう面も確かになくはないわね」 (太郎)

上記の部分否定を表す基本的な用法と異なるものとして、全否定を表す場合が挙げられる。

(18) 「ここは彼らの世界よ。地底で起っていることで彼らの知らないことはないわ。」

(世界)

この用法は「ないことはない」表現においてのみ見られる。泉原（2007）において上記のような用法は「超全部肯定」と名付けられている（p.1060）。この用法のバリエーションについては後述する。

### 3.3 とりたて助詞「は」「も」による相違

四つのいずれの表現の場合も、外部否定の作用を受ける内部否定はとりたて助詞「も」または「は」を伴っている。先ず、「も」を伴う場合について上記の例7（再掲）及び下記の例19～21を基に検討してみる。

(7) だが、それが事件の発端だったといえなくもない。 (平成)

(19) 髪をオールバックにした細長い顔の、若いけわしさを一点に集めたような眉間の皺は、泣き出しそうな表情に見えなくもなかった。 (百年)

(20) 生意気なもの少しはあるが、考え方によっては、可愛いと思えないことももない。 (数学)

(21) 大抵の場合失敗の原因は、間接的にはともかく直接的には男にあり、だから真賀木も、謝った。「ごめんなさい」この場合、これ以外の言葉は存在しない。申し訳ない、すみません、ワルイ、探せば見つからないものでももないが、誠実な男なら、とりあえずごめんなさい、と言う。 (百年)

先ず、各文の、述語の出来事の外部否定形式を省いて考えれば明らかになるように、「言えない」（例7）「泣き出しそうな表情に見えない」（例19）「可愛いと思えない」（例20）「見つからない」（例21）などと、その度合いや確率はゼロであることが内部否定の形式により主張される。その内部否定形式を単に外部否定形式で包み込めば、「言えなくない」のように否定的主張が否定で打ち消された、「言える可能性がある」といった肯定的意味が成立するが、とりたて助詞「も」の共起により、「言える可能性もある」という風に、「言える」「見える」などの述語の成立・存続などの確率、あるいは状態の度合いがわずかであることが強調される。このように二重否定形式にとりたて助詞「も」が共起する場合に、確率・度合いはゼロではないが、非常に少ないことが表現される。故に、肯定的事態の成立・存続可能性などに触れる程度の言及として捉えることができる。

一方、とりたて助詞「は」が共起する場合、結果として表現される度合い・確率などはゼロに等しいものではない。外部否定を省いた内部否定は「も」の場合と同様に全否定を表現する。それに外部否定及びとりたて助詞「は」が加われば、内部否定の全否定主張が打ち消され、全否定ではないことが表現される。このように全否定ではないことが表現されるのみであり、その可能性の少なさは「は」によって強調されるわけではない。それ故、「言える」「泣き出しそうな表情に見える」「可愛いと思える」「見つかる」可能性があることが表現される。「は」は、内部否定形式の表す否定的な主張などを焦点化しつつ、否定の作用の働く要素として取り立てるのみで、実現可能性の大小の如何に触れないと言える。無論、「は」が共起しても、二重否定である以上肯定と比較すれば、確率・度合いは低く、部分否定に止まった言い方になる。すなわち、内部否定の主張の全称性が否定されるのみであり、主張全体が取り消されるわけではない。一方で、その言い方を話し手がわざわざ選ぶのは、全否定でないことを強調する必要がある場合であると言える。「は」及び「も」の共起による相違を以下において図表化してみる。

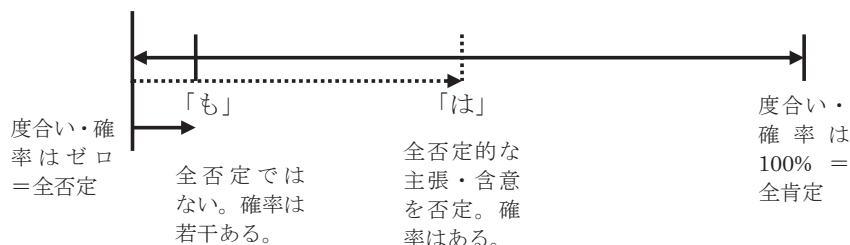


図 1 二重否定表現におけるとりたて助詞「は」「も」の現れによる相違

なお、前述したように「～なくは/もない」（「は」:20例、「も」:12例）、「～ないことは/もない」（「は」:73例、「も」:30例）及び「～ないものでは/もない」（「は」:9例、「も」:4例）の三表現の場合は、実例において「は」が多く現れ、一方「～ないでも/はない」（「も」:33例、「は」:26例）表現において「も」が多く用いられる。

とりたて助詞「は」及び「も」はいずれの二重否定の形式とも共起可能である。「は」「も」の選択は諸用法の意味によって決定される。従って、各二重否定表現における「は」「も」の現れの大小は各表現がそれぞれの用法においてどの程度用いられるかということに左右される。以下において、実例分析を通して抽出した用法を基準に各二重否定表現がどのように現れるのか分析しつつ、「は」「も」の現れについても考察したいと思う。

#### 4. 諸用法における二重否定表現の使い分け

部分否定を表すにせよ、全否定を表すにせよ、二重否定表現は迂言的な表現形式であり、話し手がその表現を敢えて選択するには理由があるはずである。本節において、どのような時に二重否定表現が用いられるかを分析することにより、その使い分けについて検討したいと思う。

なお、後述する用法は全て必ずしも相容れないものではなく、二つの用法が重なり合うことも可能である。例えば、出来事の生起、可能性、存在などが皆無でないことを表す用法は先行する発話やそれにより生じる含意の否定を表す用法と重なり合うことができる。その場合、会話の相手による先行する発言といった文脈により生じている皆無であるという含意を否定しながら、出来事の生起、存在などの可能性を主張する言い方になる。しかし、皆無でないという主張を表すためには、上述のような文脈や含意の存在が必ずしも必要でないので、本論においては二つの異なる用法として位置付ける。先行する発話やそれにより生じる含意の用法はこのように他の用法と重なり合うことが最も多く、二重否定表現は後述するメタ否定としての役割を果たしていることを示している。

##### 4.1 先行する発話やそれにより生じる含意を否定する場合

Horn (1989) はメタ否定を「先行する発話またはそれにより生じる慣習的含意や会話含意等を否定する手段」として定義している (p.363)。英語においては 'It is not the case' や 'It is not true' などの表現により、このようなメタ否定を表現することができる。日本語の二重否定表現も同様に、先行する発話やそれにより生じる含意を否定するために用いることが可能であり、メタ否定の用



法を持つと言える。

二重否定表現は先行する発話によって生じる（可能性のある）含意を否定し、補足をしたり、例外を指摘したりするために用いられる。生じるかも知れない誤解を避けるために用いる場合やより厳密な言い方になるように補足する場合がその表現意図として挙げられる。この用法の文に副詞「尤も」が頻繁に現れる。

(22) 時代からいってまぜ御飯のほうが当然といえるのだが、彼女らはまだ純粋の米の弁当を持ってこられる家庭の生徒が多かったからである。もっとも例外もなくはなかった。  
(楡家)

(23) 小兵衛と牛堀は、別に昵懇の間柄というのではない。だが、たがいに知らぬでもなかったのである。  
(劍客)

先行する発話やそれにより生じる含意を否定する場合、内部否定の述語として下記のように意志動詞が現れても良い。述語として意志動詞が現れる場合、先行する発話やそれにより生じる含意を否定しながら、慣習的・反復的な出来事の実現を容認したり、一回きりの個別出来事の実現を容認したりするために二重否定表現が用いられる。

(24) 「だけど、君は、よくこんな場所を見つけたなあ、クレッソンていうのは、気むずかしいからなあ、ちょっとでも水が汚れてたらもうだめだろう。君の家は、クレッソン食べないの」  
「食べないことはないんだけど、ここに生えるクレッソンは、おふくろは信用しないんだ」  
(太郎)

(25) 「外食はしない。そうかといって全然食べないでもない。ほくは、これから食べないでいられる訓練を始めるんです」  
(孤高)

(26) 大谷投手のように、米国でのプレイを希望する一方、日本のドラフトで日本球団が指名するとその球団が交渉権を持つ。しかし、米国の球団の交渉を認めないものではない。  
(朝日新聞 2012年10月26日)

意志性述語を用いた先行する発話やそれにより生じる含意を否定する用法は「～ないことは/もない」「～ないでも/はない」「～ないものでは/もない」の三表現において見られることが多い。庵他(2001)においても指摘されているように、「～なくは/もない」表現は原則として意志動詞を内部否定の述語として取らない。しかし、条件形の共起などによってこの制約が緩和され、「歌えと言われれば、歌わなくはない」のように「歌わないだろう」という含意を否定しながら、譲歩する用法などに「～なくは/もない」を用いることができる<sup>(5)</sup>。「～ないものでは/もない」表現も同様に非意志述語を取ることが多い。

上記の22から26までのいずれの例の場合も、先行する発話や文脈等により生じる（または生じ得ると話し手が推測する）皆無であるという含意を否定することにより部分否定的な解釈が得られている。例25では、「そうかといって」という表現により先行する発話によって生じている含意の否定であることが明示されている。なお、この例の否定は後述する全称の否定による部分否定でもある。全称を表す否定呼応副詞「全然」の共起によって部分否定解釈が明示的に示されている。

以上の例からも明らかなように二重否定表現はこの用法で用いられる際にとりたて助詞「は」を取ることが多い。先行する発話やそれによって生じる含意を焦点化し、否定の作用を受ける対

象とするためであると解釈可能である。一方、「～ないでも / はない」の場合、上記の例のように「も」を取ることが多い。「X ではない」という風に先ず X を否定し、そこから導き出せる推論（つまり、本稿で言う含意）「では、Y だろう」を否定し「Y でもない」と述べているからであると言える。

#### 4.2 生起・可能性・存在などが皆無でないことを主張したい場合

二重否定表現は、先行する表現が表している出来事（生起、可能性、存在などが皆無でないこと）を表す場合に用いられる。この用法の場合、内部否定の述語として否定形容詞が現れることが多い（例 27、28）が、動詞述語が現れる場合もある（例 21（再掲）、29）<sup>(6)</sup>。

二重否定の四つの形式全てがこの意味を表すことができる。

(27) ただそういう可能性もないではないということを私は言っておるですよ。 （世界）

(28) ロンドンもチャンスはないことはないと思う」と抱負を語った。

（朝日新聞 2012 年 1 月 22 日）

(21) 大抵の場合失敗の原因は、間接的にはともかく直接的には男にあり、だから真賀木も、謝った。「ごめんなさい」この場合、これ以外の言葉は存在しない。申し訳ない、すみません、ワルイ、探せば見つからないものでもないが、誠実な男なら、とりあえずごめんなさい、と言う。 （百年）

(29) また、そうした展覧会の代表的作品が美術雑誌に転載されることもなくはないが、印刷がわるくて、原画の色感がよくわからない。 （王様）

皆無でないことを主張する場合は、文により表現される可能性、存在、経験などがわずかながらあるが、存在することが表現される（例 27）。例 28 のように何かの有無を問題にし、わずかながらあることを述べるためにも頻繁に用いられる。更に、謙遜した言い方をする場合（例 28）や皆無ではないが不充分、または問題であることを表す場合（例 29）にも用いられる。このように不充分さや問題指摘をする場合に、逆説表現や否定的な言い方を伴うことが多い。

皆無ではないことにより表現される生起・可能性・存在の極小性を更に強調するために、条件形「～ば」が用いられることがある（例 21、30）。意志動詞の条件形「～ば」が共起するのは下記のように「～ないものでも / もない」、「～ないことは / もない」、「～なくは / もない」の三表現とであり、意志動詞の実現が二重否定の述語の実現条件として提示される。

(30) 「まあ、探せばないこともないのだがね、演じる人が、また聴く人が、その断でどこまで『秋』を感じるか、ということもある」 （朝日新聞 2007 年 10 月 22 日）

出来事（生起、可能性、存在などが皆無でないこと）を表す用法の場合、二重否定形式内のとりたて助詞として「は」も「も」も現れることができる。単なる可能性の少なさを強調した指摘であれば「も」が用いられるが、その指摘が先行する文脈により生じる含意の否定として現れていれば「は」が用いられる。

特に、「～ことは / もない」「～なくは / もない」の二表現がこの用法で用いられることが多い。

#### 4.3 断定・直接的な言い方を避けたい場合

述べられる内容が話し手の主観的な判断・捉え方・感情である場合にも、二重否定表現が頻繁に用いられる。この場合、客観的な根拠が十分に示せない話し手の主観的な判断として述べられ、それ故、断定を避ける方法として二重否定表現が活用されるわけである。

(31) いささか「短絡」的な言い方になるが、一生人間の暮しというのは、こういう風に、ぎつばたして生きることなのかなあ、と思うと、うんざりしないでもないが、そんなことにまた、女々しくなるというのも、なんともいただけない自分の精神構造だと思う。  
(太郎)

(32) だが、それが事件の発端だったといえなくもない。  
(平成)

(33) (ルーマニアという国は) ふくらんだキンチャクの口から、黒海に中身が流れ出している図に見えなくもない。  
(百年)

二重否定表現の中でこの用法で最も頻繁に用いられるのは「～ないでも / はない」表現である。従って、この用法でよく用いられる感情動詞、思考動詞（「思わないではない」など）は「～ないでも / はない」表現の内部否定述語として頻繁に現れる<sup>(7)</sup>。慣用句化が進んでいると言える「気がしないでもない」もその典型例として挙げられる（例9（再掲））。

(9) サルが二匹でテレビに出ても仕方がないので、勘弁していただいたが、少し残念な気がしないでもない。  
(風)

「～なくは / もない」もこの用法で頻繁に用いられるが、その場合「言えなくもない」「考えられなくもない」のような言語活動・思考動詞の可能形（例32）や捉え方に関わる「見える」「似ている」などの非意志動詞（例33）を述語とする。

「～こともない」も主観的な判断・捉え方などを表現するために用いられる（例20、34）。更に、後悔などの否定的な感情を表現する場合にも直接的な言い方を避けた感情の提示方法として使用される（例35）。

(34) 一方、若田さんが好きだったという某店の「スタミナラーメン」は、あんかけでピリ辛スープが特徴。宇宙ラーメンと似ていないこともない。  
(朝日新聞 2009年4月10日)

(35) 持っていたトヨタ株を上京資金にあてた。いま、「あの時売らなかつたら、いくらになつただろう」と思わないこともない。  
(朝日新聞 2012年7月7日)

「～ないものではない」表現も断定を避けるために用いることができる。例21は皆無でないことを表しつつ、同時に断定を避けていると解釈可能である。

明言を避けたい場合にも二重否定表現は有効であり、この用法の下位用法として位置付けられる。

(36) 「その場合、社長の座をどうするかが問題ですよ」「何か考えでもあるのか？」  
「ないでもありません」と柳は意味ありげに言ってグラスを取った。  
(女社長)

断定・直接的な言い方を避けたい用法の場合、二重否定内のとりたて助詞として「も」が典型的に現れる。「その可能性もある」ことを指摘する程度の言い方に止めることにより、断定回避の機能を強化するからであると言える。

以上考察してきたようにどの表現も断定・直接的な言い方を避けたい用法で用いることができる。

#### 4.4 譲歩を表す場合

対人的な用法として位置づけ可能なものに、譲歩を表す場合が挙げられる。

(37) 「この質問をされたら、私は同意しないことはないだろう。」  
(朝日新聞 2012年1月14日)

一人称主体の意志に触れる譲歩用法は「～なくは / もない」「～ないことは / もない」「～ないで

も / はない」(例6)「～ないものでは / もない」の全ての表現において見られる。内部否定形式の述語動詞として意志動詞が現れ、話し手は(聞き手のために)その動詞の表す意志的な行為を実行しても良いことを述べる。「普通ならしないが、特別にしても良い」といった譲歩の意味合いを含んでいるため、二重否定形式が用いられる。

なお、この用法の場合、二重否定内のとりたて助詞として「は」も「も」も現れることができる。何らかの先行する発話やそれにより生じる含意の否定としても捉えられる場合は「は」が用いられ(例26)、一方、実現可能性が残されていることの強調であれば「も」が用いられる。前者の場合、「普段はしない」といった慣習的な含意や「きっとしてくれないだろう」という聞き手の予測などが否定の作用を受ける対象となると考えることができる。

#### 4.5 和らげ・配慮を表す場合

二重否定表現が頻繁に用いられるもう一つの場合として挙げられるのは、主張を弱め、断定を避けることにより和らげの効果を発揮し、聞き手に対する配慮を表現する場合である。

二重否定表現が和らげ・配慮を表現するために用いられる場合の一つとして相手の主張を否定したり、それに反論したりする用法が挙げられる。この場合、対人的な衝突を避けるために、強い主張を避けた二重否定表現が使われる。

(38) 谷口が、三郎は殺された女のヒモだったことを説明して、「その三郎が、偶然、お宅の玄関で殺されるわけはありませんよ。そうでしょう?」と言った。

「珍しい偶然ですね、確かに」と久子はいささかも動ぜず、「でも、長い人生の中には、そういうこともありえないではありません」(女社長)

上記の例の場合、二重否定表現「～ないでも / はない」で先行する相手の主張を否定している。しかし、その否定の仕方はあくまでも部分的な否定であり、強い主張を和らげたものである<sup>(8)</sup>。「～ないことは / もない」及び「なくは / もない」も次のようにこの用法で用いることが可能である。

(39) 「……つまり、ひとくちにいえば子供には自由にのびのび描かせようというわけですね。描きたいと思う気持ちを起させて、どしどし惜しまずにやれということでしょう?」

「そういえなくてもいいのですが……」(王様)

(40) 「イルカの種類にイッカクというのがあるけれど、正確に言うとこれは角ではなくて、上顎の門歯の一本が頭のとっぺんで成長したものなの。長さは約二・五メートルで、まっすぐで、角にはねじ模様がドリルみたいに刻みこまれているのよ。でもこれは特殊な水生動物だし、中世の人々の目に触れることはあまりなかったでしょうね。」

「哺乳類でいうと、中新世にあらわれては次々に消えていった様々な動物の中には一角に似たものがないわけではないわね。」(世界)

この場合話し手は聞き手が同意を求めた主張を否定し、それに対する反対意見を述べているが、二重否定を用いることで、全否定を避け、和らげている。

聞き手に対する理解を示すためにも二重否定を用いることができる。この場合、内部否定の述語動詞として「分かる」が現れる。この用法は「～ないでもない」「～なくは / もない」の両表現に限定される。

(41) 「告げ口は、した方もされた方も傷つけるわ。いいのよ、それはそれで。こちらにやましいことがなければ、心配ないわ」純子はため息をついた。

「そりゃ、あなたの言うことは分からないでもないけどね。向こうは色々と汚い手を使って来るのよ。こっちだって対抗しなきゃ。——そうだわ！」 (女社長)

(42) 「やっぱり、おすしだね」。そう口にしたくなる気持ちも分からなくはない。

(朝日新聞 2009年10月4日)

但し、二重否定を使う以上「よく、わかる」のような強い同情、すなわち全肯定的な意味が表現されるわけではなく、一定の理解を示すのに止まる。更に、例41のように逆接的な表現を伴わせて用いる場合があり、聞き手に対して一定の理解を示しつつも、聞き手と異なる意見を導入する場合にも用いられる。その場合も表現意図は、導入する反対意見の和らげであると考えられることができる。

和らげ・配慮を表す場合、二重否定表現内のとりたて助詞として「は」も「も」も現れる。和らげる必要があるのは対立的な意見であるならば、先行する談話等に現れている相手の意見を否定する言い方として表現可能であり、先行する発話やそれにより生じる含意の否定の一種となり、「は」を取る。一方、「も」を用いれば、断定を避けることによる和らげ効果が発揮される。

#### 4.6 全称的表現を否定する場合

二重否定を述語とする文に全称表現が共起している場合、それらが否定の焦点となり、その結果、全称性が否定された部分的な解釈が成り立つ。この場合、「全然」「絶対」などの否定呼応副詞により生じる全否定解釈が否定され、部分否定解釈が成り立つ<sup>(9)</sup>。つまり、内部否定形式の作用域外にある「全然」などの全称否定表現は、外部否定形式の作用域に入り、否定の焦点となる。この用法は例43のように出来事描写的に用いられる場合もあるが、先行する表現により生じる(かも知れないと話し手が懸念する)全称的な含意を否定する場合にも使われる(例44)。出来事描写的に用いられる場合、二重否定内のとりたて助詞として「も」が現れることが可能であるが、先行する発話やそれにより生じる含意を取り消しながら、否定の焦点を表示する場合、「は」が現れる。この用法で用いられるのは「～ないでも / はない」及び「～ないことは / もない」の二表現である。

(43) 「ついて来るがいい、逃げようたってもうどうにもならないんだ、おとなしく暑まですいて来るがいい」加藤は、そうなることを全然予期しないでもなかった。 (孤高)

(44) 「現在に至るまで、われわれはいわゆる共同債券を後押ししていない。もちろん、絶対ないことはないが、必要でないし適切でないというのがこれまでのわれわれの認識だ」と語った。 (朝日新聞 2010年12月1日)

#### 4.7 肯定的な意味を表す場合

原口(1982)で指摘されているように二重否定表現は、否定で否定を打ち消した肯定的な表現としても用いられる。しかし、実例においてこの用法が見られるのは「～ないことはない」表現においてのみである。肯定的な意味を表す用法は、全否定による全肯定を表現する場合と、可能性を強調する場合に分けられる。

(a) 否定の否定による全肯定的な意味を表す場合

(45) つまり、ゆっくり解いて解けるではダメで、如何に速く解くかが重要となります。そのためには、早い時期に“知らないことはない”という状態に仕上げ、たっぷりとした演習期間をとることが重要です。 (朝日新聞 2012年1月11日)

- (46) モルディブの首都マレも、発展途上の他の国々と並んで、路地を歩くと工事現場にぶつからないことはないほど市内各地で住宅建築が行われている。

(朝日新聞 2011 年 2 月 5 日)

この用法で最もよく使われるのは動詞「知る」であり、当該のテーマについて知り得る全ての知識を獲得していることを表す。しかし、例 46 のように他の動詞を内部否定の述語として用いることも可能である。とりたて助詞として「は」が現れ、「は」により取り立てられた内部否定の否定的主張が外部否定により却下され、全肯定的な解釈が得られる。なお、この用法において形式名詞「こと」は述語動詞の対象（動詞「知る」の場合、知識の内容）を表現する。

(b) 可能性の強調

「～ないことはない」表現に限定されたもう一つの用法に可能性を強調する用法がある。

- (47) 「これは嘘じゃありません。約束します。我々には国家がついています。我々にできないことはないのです」 (世界)

- (48) 僕にできて、若手にできないことはない。 (朝日新聞 2009 年 12 月 25 日)

内部否定の主張を外部否定で打ち消すことにより、不可能なことはないという全肯定的表現が成立する。この表現は可能性を強調するために用いられる。

可能性を表す表現で、よく用いられるものに「やってやれないことはない」という表現がある。以下の例のように可能性がわずかであることを表す場合に用いられる。

- (49) 「この風なら、頑張れば、やってやれないことはない」 (孤高)

- (50) 「たとえ幾日、吹雪が続いても、どっちみちおれは死なないという自信がある。やってやれないことはないという自信があるのだ」 (孤高)

「やってやれないことはない」表現は文脈次第で、全肯定的な意味を表現することも可能であろう。この場合、可能性の大小が文脈によって大きく左右されるわけである。

なお、可能性を強調する用法の場合、二重否定内のとりたて助詞として「は」が用いられることが多い。

以上見てきたように「～ないことはない」表現は肯定的な意味を表すために用いられる。とりわけ、可能性を強調する際に用いられることが多い。ここからも窺えるように「～ないことはない」表現は出来事描写性が低く、話し手の主張を表すために用いられる。従って、他の三形式と異なり、過去形を殆ど取らない。

以上の考察を通して明らかになった四つの二重否定表現の使い分けを以下のようにまとめることができる。

表 2 二重否定表現の諸用法の使い分け

使い分け		「～なくは/ もない」	「～ないでも/ はない」	「～ないこと は/もない」	「～ないもの では/もない」
用法	例外の指摘・補足	○	○	○	○
	意志的な行為	△	○	○	○
	生起・可能性・存在などが皆無 ではない	○	○	○	○
	意志Vの条件形バとの共起	○	×	○	○
	断定の回避	○	○	○	○
	譲歩	△	○	○	○
	和らげ	○	○	○	×
	理解の提示	○	○	×	×
	全称的表現の否定	×	○	○	×
	全肯定	×	×	○	×
	可能性の強調	×	×	○	×
	形式	意志性述語との共起	△	○	○
名詞・ナ形容詞述語との共起		×	△	○	△
過去形の現れ		○	○	△	×

【○】：該当する（用法または形式的な特徴を有する）、【×】：該当しない（用法または形式的な特徴を有さない）、【△】：低頻度で共起する・現れる

二重否定が使用される文脈に着目すると、以下の四つの場合いずれの表現も使用可能である。

- 1) 何らかの否定的な含意を否定しながら、例外を指摘したり、補足したりする場合及び、先行する発話やそれにより生じる含意を否定し、意志・慣習的な行為を認める場合
- 2) 生起・可能性・存在などが皆無でないことを表す場合
- 3) 断定や直接的な言い方を避けたい場合
- 4) 譲歩の意味を表す場合

一方、以下の場合において使い分けが見られる。

- 1) 和らげを表す場合は「～ないものでもない」以外の三表現が用いられるが、他者に対する理解を示す用法は、「～なくは/もない」「～ないでもない」の二表現に限定される。
- 2) 文中共起する全称的な要素を否定し、部分否定的な解釈を表す場合は「～ないでも/はない」「～ないことは/もない」の二表現が用いられる。
- 3) 全肯定を表す用法、及び可能性を強調する用法は「～ないことはない」表現に限定される。

上記の表から「～ないものでは/もない」表現の使用が最も限定的であることが窺える。同表現の実例の数も四表現の中でも最も少ない。一方、「～なくは/もない」表現は他の表現と異なり、出来事描写性を有し、意志表現とあまり馴染まない。その一方で、「～ないことは/もない」表現は使用範囲が最も広く、否定的な主張を最もよく表現する。それ故、過去形述語とは比較的馴染まない。

## 5. 終わりに

以上、「～なくは/もない」「～ないでも/はない」「～ないことは/もない」「～ないものでは/もない」の二重否定表現の諸用法を分析し、それらの使い分けについて明らかにしてきた。本稿の目的は日本語教育に応用可能な使い分け方の解明であった。表2が示しているように二つ以上の表現が

使用可能な用法も多いものの、ある程度の使い分けもあることが明らかにできた。

本稿の考察の結果、日本語の二重否定表現は対人コミュニケーションにおいて非常に重要な役割を果たしていることが明らかになった。二重否定表現はコミュニケーションにおいて相手の主張を否定する際の和らげに用いられ、対人関係の衝突を回避する重要な役割を担っている。その上、話し手自身が主張をする際にその断定性を弱める効果を発揮する。話し手の主観的な捉え方や個人的な感情を述べる場合、断定を避けた言い方として用いられ、また話し手自身に関わる事柄に対して、謙遜した言い方としても用いられることが明らかになった。たとえ対立する主張をする場合であっても、他者の考え方を受け入れる余地を残すことが重視される日本語コミュニケーションにおいて、断定の回避は重要な役割であると言える。二重否定表現は日本語を曖昧にし、難しくしているという見解もあるが(林 2005)、こうしてみると、実に奥ゆかしい日本的な表現で、他者配慮表現の一つとして位置付け可能であることが窺われる。その対人コミュニケーション論的な機能を詳細に明らかにするためには、綿密な談話分析が必要であると考えられるが、今後の課題としたい。

## 注

- (1) とりたて助詞「は」「も」の掲載順序は用例に現れるそれぞれの回数の多い順による。
- (2) この定義が示している通り、二重否定には「～ないわけではない」「～ないのではない」「～ないとはいえない」などの他の表現も含まれるが、前者の二つの表現の「～わけではない」「～のではない」形式は否定の作用域を広げる役割も担っているため、後者は「限る」の意味を含んだ形式であるため、本論では対象外とした。本論では上級日本語教育で二重否定表現として一緒に導入される形式に対象を絞った。
- (3) 中右 (1994) では英語の用例に関する分析が行われ、定式化がなされている。
- (4) 「も」の 33 例に対する「は」の例は 26 例である。
- (5) 譲歩用法については 4.4 節で取り挙げる。
- (6) 内部否定の述語としてどの二重否定表現も否定形容詞をとることが可能である。
- (7) これらのいずれの動詞カテゴリーも四つの表現の中で「～ないでも / はない」表現と最も多く現れていた。
- (8) この例の場合、「そういうことも」の「も」及び述語の「あり得る」によっても和らげが行われている。
- (9) 一方、部分否定の意味を表現する副詞「まんざら」と共起した場合(否定の作用域外にある「まんざら」によって) 否定の意味が強調される。(まんざら食えないこともない。(蛙))

## 用例出典

(あすなろ):『あすなろ物語』, (雨):『黒い雨』, (アメリカひじき):『アメリカひじき・日垂るの墓』, (美しき村):『風立ちぬ・美しき村』, (王様):『パニック・裸の王様』, (女社長):『女社長に乾杯!』, (風):『風に吹かれて』, (錦繡):『錦繡』, (剣客):『剣客商売』, (草):『草の花』, (国盗り):『国盗り物語』, (恋人):『エディプスの恋人』, (孤高):『孤高の人』, (堅琴):『ビルマの堅琴』, (さぶ):『さぶ』, (塩狩峠):『塩狩峠』, (死者):『死者の奢り・飼育』, (忍ぶ):『忍ぶ川』, (少女):『聖少女』, (人生):『人生論ノート』, (植物):『砂上の植物群』, (新橋):『新橋烏森口青春篇』, (数学):『若き数学者のアメリカ』, (砂):『砂の女』, (世界):『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』, (戦艦):『戦艦武蔵』, (小さき者):『小さき者へ・生れ出づる悩み』, (太郎):『太郎物語』, (沈黙):『沈黙』, (点):『点と線』, (夏):『一瞬の夏』, (榆家):『榆家の人びと』, (野菊):『野菊の墓』, (二十歳):『二十歳の原点』, (野火):『野火』, (花埋み):『花埋み』, (冬):『冬の旅』, (ブン):『ブンとフン』, (放浪記):『放浪記』, (モオツァルト):『モオツァルト・



無常という事』, (山本):『山本五十六』, (雪国)『雪国』, (檸檬):『檸檬』以上『新潮文庫 100冊 (CD-ROM版)』に収録されている作品。その他:(アップル):『誕生日のアップルパイ』文藝春秋, (予言):『百年の預言』, 朝日新聞, 読売新聞

## 参考文献

- (1) 庵 功雄他 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
- (2) 泉原省二 (2007) 『日本語類義表現使い分け辞典』 研究社
- (3) 国際交流基金 (1994) 『日本語能力試験主題基準 [改訂版]』 凡人社
- (4) 高梨信乃 (2010) 『評価のモダリティ』 くろしお出版
- (5) 友松悦子他 (1996) 『改訂版どんなときどう使う 日本語表現文型 500』 アルク
- (6) 陶 振孝 (1991) 「日本語の二重否定について」『日本語学』 第10巻, 明治書院
- (7) 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』, pp.121-137, 大修館書店
- (8) 原口庄輔 (1982) 『ことばの文化』 こびあん書房
- (9) 松原幸子 (2008) 「『～ないものでもない』に関して」『日中言語研究と日本語教育』 創刊号, pp.44-54, 好文出版
- (10) 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店
- (11) 林 楽常 (2005) 「二重否定表現の一考察 ——形式と意味の相関性を中心に——」『人間文化研究』 3号, pp.27-39, 長崎純心大学・長崎純心大学短期大学部
- (12) Downing, L. H. (2000). *Negation, Text Worlds, and Discourse: The Pragmatics of Fictions*, Ablex Publishing Corporation.
- (13) Horn, L. R. (1989). *A Natural History of Negation*, The University of Chicago Press.
- (14) Kato, Y. (1985). Negative Sentences in Japanese, *Sophia Linguistica*: 19
- (15) Tottie, G. (1991). *Negation in English Speech and Writing: A Study in Variation*, Academic Press, Inc.

## 付記

本稿をまとめるに当たり、貴重なコメントを下された査読者の先生方、東京外国語大学名誉教授工藤浩先生、同志社大学 Associated Kyoto Program の桑平とみ子先生に記して感謝の意を表したい。

(国際交流推進機構国際交流センター・教授)

## Speaker Intention and Context in the Choice of Double Negation: An Analysis of Several Common Japanese Expressions

Ruchira Palihawadana

### Abstract

This study attempts to reveal various usages of commonly used double negation expressions: *naku wa/mo nai*, *nai demo/wa nai*, *nai koto wa/mo nai*, *nai mono dewa/mo nai*, focusing specifically on the purpose of usage and context in which they appear. All four expressions share the function of 1) avoidance of assertion and softening expressions, 2) metalinguistically negating a preceding statement or implicature triggered by it, with the purpose of indicating an exception or supplementing information, and 3) denying that there is no probability left at all. The two usages of concession and acknowledgment call for volitional predicates and therefore some semantic restrictions are seen in the case of *Naku wa/mo nai* which does not frequently co-appear with volitional predicates. Restrictions are seen in 1) the usage of showing understanding and sympathy towards the interlocutor; limited to the *Naku wa/mo nai* and *Nai demo/wa nai* expressions, 2) the usage of negating a universal negative in order to express a partial negative reading; restricted to the *Nai demo/wa nai* and *Nai koto wa/mo nai* expressions, and 3) the usage of expressing total affirmation by canceling the negative assertion; limited to the *Nai koto wa nai* expression. Thus this study shows how Japanese double negation expressions serve as a linguistic measure to avoid assertion and thereby leave room for the interlocutor to express his opinion and participate in the conversation, a feature highly valued in the Japanese language as an essential element of smooth conversation.

(Professor, The International Center, Kyoto University)